

人工的・道徳的・行為者について機械倫理が解決すべき三つの問題

Jiang Xuefei

もし完全に自律的な機械が開発されれば、そうした機械の行為や行為の結果に対して、誰が責任を負うべきだろうか。そうした機械は人間の操作から独立していて、自分の判断で行為を実行するため、技術者や利用者に責任を負わせるのは難しいだろう。そして、もし近い将来において人間の知能と同じレベルの知的機械、あるいは人間の知能以上の機械が開発されれば、その機械はもはや人間と同等の人間性をもつだろうと主張する人さえいる。このような状況に対する一つの解決策は、機械を道徳的・行為者として認めることである。

機械倫理は、広い意味での機械にまつわる倫理的諸問題に取り組んでいる分野であるが、とりわけ機械がどのようにして道徳的・行為者となるのかという問題が、近年盛んに議論されている。人工物は道徳的・行為者となるのかどうか、すなわち、人工的・道徳的・行為者 (Artificial Moral Agents, AMAs) は存在するのかどうかをめぐって、道徳的・行為者として認められるための条件がさまざまな論者から提案されているが、いまだ明確な合意は得られていない。

さらに、機械倫理あるいは AMAs そのものに対する批判も少なくない。例えば、Ryan Tonkens は「機械倫理に対する異議」という論文の中で、そもそも機械に道徳的枠組みを適用すべきかどうか疑問を呈しながら、AMAs をカント哲学的な概念だとして批判している。あるいは J. Snapper のように、機械の行いに対して、責任を負うべきなのは開発者の方だと主張する論者もいる。すなわち Snapper の考えに従えば、開発者こそが、技術を設計する最初の段階でその実際的な応用を予測し、機械が引き起こす結果に対して積極的な責任を負うべきだということになる。

しかしながら、私の考えでは、高度な技術に道徳的な要素を加えることは、重要である。一方で、機械が道徳的・行為者になるための条件を考案するのみでは、AMAs を発展させる見込みは薄い。本発表では、まずなぜそもそも機械を道徳的・行為者とみなすべきなのかを再検討した上で、AMAs に対する批判に対処する。さらに、AMAs について機械倫理が解決すべき三つの問題を提起し、検証する。その三つの問題とは、機械倫理には明確な概念が欠如していること、技術の発展に合わせた動的な視点が欠如していること、開発者など技術に従事する人たちの責任に限界があること、の三つである。